

ラリタヴィスタラの部派

岡野, 潔

<https://hdl.handle.net/2324/7337638>

出版情報 : Journal of Religious Studies. 279, pp.181-182, 1989-03-31. Japanese Association for Religious Studies

バージョン :

権利関係 :



ラリタヴィスタラの部派

岡野 潔

ラリタヴィスタラ(LV)には阿舎より抜かれて付加された部分が存する。現存のLVは普曜経の原本に多くの付加がなされて出来たものであるが、この普曜経の成立後に付加された部分に、阿舎からそっくり借用されてきた、原材料まるだしの箇所が存するのである。そこでこの稿では、LVの付加部分における阿舎の借用箇所を指摘し、あわせてそれらの資料の部派所属を考察してみたい。

まず、サッチャカ大経(M.N. No. 36)をそのまま用いている部分がLVの付加部分に六箇所存在する。(A)アーラーダに就いて学ば 238・14—239・16 (B)前代未聞の三譬喩 246・8—248・5 (C)修行地を見出す 248・6—12 (D)止息禅の苦行 251・6—252・7 (E)断食の苦行 254・1—256・10 (F)苦行の放棄 263・6—20

これらは逐字的な借用であって、今あげた六つの断片によりサッチャカ大経の全体の半分近くの原文を回収することができる。サッチャカ大経には漢訳はなく、パーリ本が存在するだけであるが、LVと同じ部分をマハーヴァスツ(MV)からも回収することができる。MVのいわゆる『第一出家経』(MV, I, 115—133)は意図的に阿舎資料のみを素材にしてつくられており、そこからサッチャカ大経の原文が回収できるのである。こうして得られたMVの断片群はLVの断片群と全部対応させる。

- (A)=MV. II, 118・1—119・6 (=PTS. MN. I, 240・26=160・33—165・14)
 - (B)=MV. II, 121・1—123・15 (MN. I, 240・29—242・22)
 - (C)=MV. II, 123・16—124・1 (MN. I, 240・26=166・35—167・8)
 - (D)=MV. II, 124・1—125・7(=MN. I, 242・23—244・37)
 - (E)=MV. II, 125・7—130・6(=MN. I, 245・6—246・19)
 - (F)=MV. III, 130・7—18(=MN. II, 246・20—247・5)
- LV本サッチャカ大経はサンسكريット化され、MV本は俗

語のままにもかかわらず、両者の類似性は著しい。両者がいかに近いかは、カッコにあげたパーリ本と比べると、一層明らかになる。L VとM Vはそれぞれ近縁の部派の本来同一の阿含を借用したのではないか。

ではL Vの付加部分に借用された他の阿含断片を検討してみよう。実はサッチャカ大経と同じことが別の三つの断片においても見られるのである。

(G) 精勤経 (魔の誘惑) 261・2—263・5

(H) 梵天の勧請 395・16—398・17, 399・21—401・20

(I) アージーヴァカ教徒との出会い 405・3—406・15

これら三つの阿含断片にもパーリ資料のほか、M Vにおいて対応箇所が見出せる。つまりM Vも同じように阿含資料を借りているわけである。

(D) = M V. I, 238・3—240・17 (= Suttanipāta 425—449偈)

(E) = M V. III, 314・13—319・18 (= Mahāragga 1・5・1—13

節)

(I) = M V. III, 325・12—327・7 (Mahāragga 1・6・7—9節)

これらにおいても先の場合と等しく、L VとM Vに用いられたそれらの阿含断片はきわめて類似し、パーリ本からは隔たっている。他に付加部分における阿含の借用としては、(J) 般涅槃への魔の勧め 377・9—21 (Mahāparinibbāna, 3・34 に対応) があるが、M Vに対応する借用はない。また付加部分(K) 魔の娘たちの誘惑 378・4—379・14と(L) アーラーダの死を知り、五比丘をえらぶ 403・18—404・13はM Vとの対応が見出せるが、

しかし素材は手が加えられ、単純な比較を許さない点があるため、ここでは指摘にとどめる。) 以上(A)から(I)の九つのL VとM Vが原材料をさらけ出している部分を検討することによって、そこで用いられているソースは系統的に大変近く、本来同一のもので、両ソースの距離は大きなグループの中の異なる分派と見なしうる程度のものである、と十分結論ができる。そこでL VとM Vは部派の上で同系統ではないか、と推測される。M Vは大衆部の説出世部の仏伝である。『異部宗輪論』によれば、大衆部には説出世部を含む本来九つの異派が存在した。L Vが付加増広をなすにあたって用いた阿含はやはり大衆部の中の一派のものではなかっただろうか。